



いよいよ夏の研究活動が始まりました。今年の山頂は世界遺産効果で山開き以来、予想以上の混雑です。測候所に登る最後の馬ノ背急坂は登山者の増加で登山道の崩れが激しく、埋めてある電線のカバーが露出し、一時はブルによる荷物の運搬が危ぶまれました。十六日に山頂管理の登山家たち（山頂班）が通電に成功して開所をし、観測機材も何とか担ぎ上げたので、現在、山頂には十人以上の研究者が入れ代わりに滞在して観測などの研究をしています。

その中心にいて電源や大気を取り入れ口の配分などを任切っているのは東京理科大学の三浦和彦准教授です。海洋大気の専門家でもある三浦さんはNPOの発足当初から、フィールド研究者としての経験や付き合いやすいキャラクターが頼りにされて山

富士山頂から

頂観測の指導的な立場にあります。「本当は高山病になるし、山には弱いのですよ」と言いながらも、彼がいないと始まらないので、毎年山に登って頑張っています。

一昨年から東京理科大学の中に山岳大気研究部門を立ち上げて本格的に富士山観測に参加している研究グループのリーダーでもあります。山岳観測にかける情熱は半端ではありません。三浦グループの仕事は超微小なエアロゾルから大気電気まで多岐にわたっています。毎年二十人以上の若手が発表会を行っています。「雲粒の成長を雲の上と下で測定して、その化学成分を調べ



る」など、意欲的な研究が多く、学会でも注目されています。

（土器屋 由紀子＝富士山測候所を活用する会理事）